INDEPENDENT MUSIC COMPANIES ASSOCIATION

翻訳提供:

WORLDWIDE INDEPENDENT NETWORK

ストリーミング加入者
10億人突破、さらなる成長へ...

挑戦、実験、そして
連携が求められる時



IMPALA 2026年 デジタル音楽プラン

はじめに

デジタル音楽市場は岐路に立っています。かつてないほど多くの人がかつてないほど多くの音楽を聴いており、ストリーミング・サービスの有料会員数は間もなく世界で10億人に達しようとしています。これは喜ばしいことです。同時に、デジタル市場がより大きく、より公正で、より多様かつ透明なものへと成長する余地は依然として大きく残されています。本書では、現在、録音音楽にとって最大の収益源であるストリーミングを中心に論じますが、ここで述べる論点はストリーミングにとどまらず、デジタル市場全体に当てはまります。

パートナーシップの精神のもと、文化的にも経済的にも、そして持続可能性の面でもその潜在力を十分に発揮するデジタル音楽市場を育てるという共通の目標に立ち、これまでにない規模の野心をもって協働すべき時が来ています。

IMPALAの提言は、デジタル・サービスに対してのみならず、規模の大小や独立系・メジャー系を問わず、レーベルおよびディストリビューターにも向けられたものです。

私たちは5つの優先課題を特定しました。

1. 収益を拡大し、公正に分配する ― 価値の格差（バリューギャップ）を解消する
2. 新譜、新進アーティスト、多様な音楽への支援を飛躍的に強化する
3. 業界横断的な来歴情報（プロヴェナンス）表示によって信頼を確立する
4. 不正行為とAIによる希薄化を止め、責任あるモデルを取り入れる
5. 気候への影響を削減し、集団的なイノベーションを強化する

背景

IMPALAの新しいデジタル音楽プランは、2か月にわたるレビューを経て策定されました。このレビューでは、関係者の皆さまに優先課題を共有していただくとともに、会員各社の幅広い分野の専門家からの意見、さらには近年の分析やセクター内で既に進行している取り組みの事例を参考にしました。ご協力いただいたすべての方に感謝申し上げます。

本プランは、現在も有効な過去の提言に加え、近年の分析を土台としています。具体的には、二層化するストリーミング経済の進展と、音楽セクターにおける多様性および独立性の重要性に関するダン・ファウラー（Dan Fowler）による評価、ならびに欧州における発見可能性（ディスカバラビリティ）に関するEUの最近の報告書が挙げられます。後者は、多様な欧州レパートリーがデジタル・サービス上で直面する数多くの障壁を明らかにしています。

不正行為とAIへの対応には協働と一層の注力が必要であるという認識がセクター全体に広がっていることを、私たちは歓迎します。真正な音楽が花開き、システムを不正に利用しようとするあらゆる企てが根絶される、健全に機能する市場は、すべての正当な事業者にとって不可欠です。同時に、他の優先課題も同様に重要であり、それらは市場全体を変革する可能性を秘めていると私たちは考えます。

そのため、私たちの提言は複数の要素から構成されており、そのすべてが、すべての参加者にとってより良い成果をもたらし健全な未来を築くために必要な、深い構造的変革に寄与するものです。本書では、デジタル音楽市場がどのように機能すべきかについての一部の既成概念を問い直します。また、過去の提言と同様に、ストリーミングにとどまらずデジタル音楽市場全体に目を向けています。提言の中には速やかに進められるものもあれば、持続的な取り組みを要するものもあります。

タイミングも重要です。規制強化を含め、まったく異なるアプローチを求める声が高まりつつあるからです。私たちはこれを、野心・実験・協働を追求し、私たち自身が主導権を握れるよう、既存の仕組みを見直し改善する好機と捉えています。12か月後に進捗を評価する予定であり、エコシステム全体のパートナーの皆さまにもその評価へのご協力をお願いする所存です。

会員各社の意見の根底にあるのは、アーティストとファンとのつながりこそがデジタル音楽の核心であるという確信です。ここに掲げる5つの優先課題は、デジタル音楽市場全体の実効的な成長にとって不可欠であり、多元性、公正性、多様性、信頼、イノベーション、そして持続可能性を強化するものだと私たちは考えます。附属書では、これらの提言に取り組むことがデジタル音楽サービスにとって、またレーベルおよびディストリビューターにとって実務上何を意味するのかを示しています。

1. 収益を拡大し、公正に分配する ― 価値の格差を解消する

デジタル音楽経済には大きな成長の潜在力があります。2026年6月時点で、音楽産業が世界の有料会員数10億人に迫っているという事実は素晴らしいことです。これは、レーベルとアーティストの絶え間ない創造性の証であると同時に、リスナーが大規模に音楽と関わり楽しむための新しい方法を生み出してきたストリーミング・プラットフォームの役割の証でもあります。しかし、この繁栄を分かち合い、才能あるアーティストにとっての成果を改善するために、なすべきことはまだ数多く残されています。その出発点となるのが、今日の価値の格差（バリューギャップ）― すなわち報酬に構造的な問題が存在する状況 ― を解消することです。今日の市場において、これにはインフレへの追随の遅れ、音楽以外のコンテンツによる音楽ロイヤルティの希薄化（ダイリューション）、収益化基準（payment thresholds）、さらに動画プラットフォーム、ソーシャルメディア、UGC（ユーザー生成コンテンツ）における音楽利用からの不十分な報酬などが含まれます。加えて、不正行為とAIもシステムから価値を流出させています。

これらの課題には慎重な対応が必要であり、すべてを一夜にして変えられるわけではないことも承知しています。出発点として、それぞれの価値の格差が業界にもたらしている損失を評価し、目指すべき到達点について目標を設定したうえで、優先順位を付けることを提案します。基本原則として、各サービスは、報酬およびプロモーション上のコミットメントといったその他の重要な取引条件に関して差別を行わないことにより、真に公平な競争条件を確保すべきです。

過去のプランでも指摘したとおり、インフレへの追随が遅れたことには代償が伴っています。成熟市場においては、音楽の価値を適正に反映したサブスクリプション価格の引き上げを歓迎します。オーディオブック、ポッドキャスト、機能性オーディオ（ファンクショナル・オーディオ）その他の形態のコンテンツを含む音楽サブスクリプションについては、音楽を犠牲にした希薄化があってはなりません。価値がどのように配分されているかについて、より高い透明性が必要です。そもそも値上げ分の配分に音楽が含まれていなければ、成長はアーティストとレーベルの成果の改善にはつながりません。バンドリングが行われる場合、音楽はすべての値上げに参加しなければなりません。

スーパーファン向けの上位ティアや、アーティストとファンをつなぐ場（アーティスト・トゥ・ファン・スペース）といった高付加価値の提供形態について、さらなる実験の余地があると私たちは考えます。一部のプラットフォームがこれらを試行していることを歓迎します。これと並行して、とりわけ成熟した市場においては、無料プラン（フリーティア）を再考することに共通の利益があると考えます。無料アクセスは、適切に運用されれば有料会員の獲得に役立ち、正規サービスの利用を促すうえで特定の市場では極めて重要です。しかし他の市場では、特に同一のコンテンツがほとんど制限なく利用できる場合、無料が有料サブスクリプションと競合し、サブスクリプション価格、市場浸透率、そして音楽全体の価値に悪影響を及ぼすことがあります。

各サービスはプラットフォーム改善のために絶えず実験を重ねており、多くの取り組みが行われています。この実験の精神は、ビジネスモデルやロイヤルティ配分にも及ぶべきです。代替的な収益配分モデルを検証することは、DSP（デジタル・サービス・プロバイダー）にとって差別化の機会となります。アーティスト・グロース型、プロラタ・テンポリス型、ファン参加型といったモデルが提案されてきましたが、実際にはほとんど検証されていません（一部のプラットフォームは異なる形態のユーザーセントリック型に取り組んでいます）。また、新譜、多様なレパートリー、新進のローカル・アーティスト、インディペンデント音楽などに対する支払いのブースト（上乗せ）といった仕組みを通じて、イノベーション、投資、リスクテイクに報いるプレミアムの導入も期待します。市場が成熟し、新規参入者が従来と異なるやり方を採る中で、多様な音楽、ローカル・アーティスト、新譜を支援するための改善について各サービスが独自の考えを持っていることも理解しています。私たちは、各サービスがこの領域で公然と競い合い、その意図を発信することを奨励します。

再生回数やリスナー数に基づく収益化基準（monetisation thresholds）も、もう一つの価値の格差です。これは根本的に不公正であり、撤廃されなければなりません。ストリーミングされた音楽には報酬が支払われるべきです。仮にこの基準が不正対策として有効であることが示されるのであれば、とりわけ新たな効果的検知ツールが開発されている現状に鑑み、その仕組みは見直され、水準は引き下げられるべきです。収益化基準が存在する場合には、真正なアーティストが認証（verification）の仕組みを通じて対象となり得るようにするとともに、留保されたロイヤルティの配分方法も調整されるべきです。現在、その価値は、既に最も多額の支払いを受けている者の利益となるように再配分されています。そうではなく、そもそもこの基準の影響を最も受けやすい者こそが、最初に配慮されるべきです。いずれにせよ、重要な変更はインディペンデント事業者との交渉の場で自由な合意のもとに行われなければならず、また、報酬が支払われる見込みが低い、あるいは適切に扱われない音楽については、全量納品義務（フル・デリバリー義務）を課すべきではありません。

従来型のストリーミング・サービスの外側、すなわちソーシャルメディア、UGC、より広くはクリエイター・エコノミーや動画プラットフォー

ムなど、音楽が消費される他の領域についても、業界としての戦略が必要です。これらの領域では、アーティストやレーベルに還流する収益はごくわずかです（例えばCMUの最近の報告書を参照）。私たちは過去の提言でもこの価値の格差を指摘しましたが、これは今なお多くの意味で最も重大な格差であり続けています。サブスクリプション価格の引き上げや流出の防止よりも問題が複雑だからです。消費が拡大するにつれ、この価値の格差はさらに広がっていくでしょう。レーベルが利用を望む場合には、Merlinのような集中許諾（コレクティブ・ライセンシング）の仕組みが尊重されなければなりません。これは、強固なインディペンデント・セクターを育てるためのダン・ファウラーの提言の一つでもありました。集中許諾は、音楽が適正に評価され、小規模事業者が不利な立場に置かれないようにするとともに、ライセンシー・ライセンサー双方にとっての効率性ももたらします。

収益を公正に分かち合ううえでは、すべての関係者に果たすべき役割があります。メジャー系・独立系を問わず、レーベルおよびディストリビューターは、WINの「フェア・デジタル・ディールズ宣言（Fair Digital Deals Declaration）」の原則を適用すべきです。これは、アドバンス（前払金）、ミニマム・ギャランティ、株式売却益を、すべての所属・契約アーティスト、および流通・配信を請け負うすべてのレーベルに分配することを意味します。同じことは、プレイリストやその他の発見支援ツールに関するコミットメントにも当てはまります。デジタル分野の取引条件は公正かつ現代的であるべきであり、旧態依然とした料率や控除項目は見直されるべきです。これに、アーティストの収益を明確に説明する透明性のある報告が伴わなければなりません。ロイヤルティ計算書には、要約と、理解に足る十分な明細の双方が備わっている必要があります。エコシステムにおいて不可欠な存在であるセッション実演家（非フィーチャード実演家）についても、その仕事に対する適正な報酬が支払われるべきであり、まだ存在しない場合には、必要に応じて全国レベルの業界交渉を通じて実現されるべきです。

2. 新譜、新進アーティスト、多様な音楽への支援を飛躍的に強化する

活力ある健全な音楽エコシステムは、あらゆる形態の多様な音楽を後押しします。私たちは、多様なレパートリーの発見可能性に関する欧州委員会（EC）報告書の指摘に、前向きな形で共に取り組むことを提案します。カタログ（旧譜）に偏った市場において、リスナーが新しい音楽と出会えるよう支援することは決定的に重要です。5年前の最初のプランで述べたとおり、多様性を機会として捉えるサービスこそが最も多くを得ることになります。それから5年を経た今、これはアーティストとファンの関係を強化する機会であるにとどまらず、規制当局の懸念に応えるためにもますます必要不可欠なものとなっています。これは、サブスクリプション型ストリーミング・サービスであれUGCやソーシャルメディアであれ、すべてのデジタル・サービスにとっての共通の機会です。その答えは、新進アーティスト、多様な音楽、そして新譜への支援を、国内外を問わず、測定可能な形で飛躍的に強化することにあります。

だからこそ私たちは、市場のどの領域に属するかを問わず、すべてのデジタル・サービスに対し、ローカルな知見と編集面での支援を最大限に高めるとともに、自社のアルゴリズムの仕組みを見直すことを求めます。キュレーションと編集における人の手による関与は不可欠であり、すべての地域、とりわけ十分に代表されていない市場（中欧・南東欧はその一例であり、欧州の北から南まで他の地域からも同様の指摘が上がっています）において強い体制を持つことが重要だと考えます。相当な市場シェアを有するDSPには、事業を展開するすべての国において、ローカルな編集の専門性（当該言語と市場に精通したエディター）の最低限の水準を確保することを求めます。キュレーションを重視していることを誇るサービスは、際立った存在となります。もちろんこれは、適切な設定によって発見可能性を高め得るテクノロジー・ツールやアルゴリズムと表裏一体です。これらのツールは、EUの発見可能性報告書が指摘した課題の克服に資する形で運用されるべきです。

多様性と発見可能性へのコミットメントは、サービスにとって、優れた音楽を称え、単に「すべての音楽が揃っている」ことをはるかに超えた次元で競争する機会です。国内外の新進アーティスト、新譜、多様なレパートリーを広めるには、人々を刺激しつなげる、能動的で測定可能な行動が必要です。これを、音楽そのものの特性、人間の専門的知見、そして調整されたアルゴリズムに基づいて行い、特定の権利者を優遇するバイアスや金銭的バイアスを排除することで、エンゲージメントの面でより良い結果が得られるでしょう。実績の報告は年次かつ測定可能であるべきで、指標としては、編集プレイリストにおける占有率、アルゴリズムによるレコメンド、プロモーション・ツールの利用状況などを、国別・言語別に、さらにジャンル、ジェンダー、その他より広い多様性の指標といった関連要素別に示すことが考えられます。

ファンとアーティストのつながりを改善することも、多様性を高めることの一部であり、サービスにとっての競争機会でもあります。すでに述べたスーパーファン向けティアは歓迎すべき投資だと考えており、これに加えてアーティストとファンをつなぐ場や、ファンの好奇心を満たす機会の拡充も重要です。会員各社からは、プレイリストを最新に保つこと、チャートのようなツールを活用すること、さらに嗜好・レコメンド・検索機能に対するユーザーの制御性を高めることについても意見が寄せられています。ファンや、ファンが音楽および付加機能とどのように関わっているかに関するデータを、権利者により多く還元することも、この方程式の重要な一部です。DSPのレポーティングが目覚ましい精度に達していることを評価するとともに、すべてのサービスがこれをさらに発展させることを奨励します。会員各社からは、ファンのエンゲージ

メントに関してより多くのデータが提供され得るはずだという意見が繰り返し寄せられており、その開発への参加にも意欲的です。

レーベルおよびディストリビューターは、アーティスト育成、レパートリーの多様性、オーディエンス・エンゲージメント（アーティストとファンをつなぐ新機能を含む）への投資を継続するとともに、正確なメタデータと発見可能性を最大化する運用によって音楽が支えられるようにすべきです。

3. 業界横断的な来歴情報（プロヴェナンス）表示によって信頼を確立する

食品やワインなど他の分野がそうしてきたように、エコシステム全体が来歴情報（プロヴェナンス）を誇りをもって受け入れ、差別化の要素とする機会があります。音楽における来歴情報とは、レコード会社と契約しているアーティスト（当該レーベルが独立系資本かメジャー系資本かの別を含む）、セルフリリースのアーティスト、ライブラリー音源、AI生成コンテンツ（使用されたツールを含む）など、コンテンツの各カテゴリーを識別することを意味します。

新たなフレームワークは、コンテンツの海の中で真正な音楽を識別し、広め、称えることを助け、ユーザーの選択とフィルタリングを支え、発見可能性とファンとのつながりを向上させるでしょう。

すでに進行中の取り組みを歓迎するとともに、最近示された事例は優れた出発点となります。今こそ、これを技術的な作業としてだけでなく、商業上の必須課題として位置づけるべき時です。当然ながらこれには、何をもって「実質的にAI生成された」とみなすかについての合意も含まれますが（後述参照）、それだけにとどまりません。メタデータの品質、透明性、表示（ラベリング）を改善することで、音楽セクターは十分な情報に基づく選択を支えることができます。消費者、クリエイター、事業者は、自分が接しているコンテンツが何であるか、それがどこから来たのか、どのように制作されたのか、そしてどのように提示され収益化されているのかを理解できるべきです。

来歴情報は表示（ラベリング）にとどまりません。共通の来歴情報フレームワークは、デジタル音楽経済全体にわたる透明性、発見可能性、説明責任のための共有インフラを生み出します。これは信頼性を示す目印として機能し、サービスが多様なレパートリーを識別して広め、インディペンデント音楽を支援することを助けると同時に、全体としての透明性も高めます。

レーベルおよびディストリビューターにとって、これはインディペンデント音楽の可視性を高める絶好の機会です。この作業は急を要します。フレームワークがひとたび整備されれば、その実効性は、広範な採用と正確な情報の入力にかかってきます。適切に構築されれば、来歴情報に関する標準は、デジタル音楽経済全体における新たな発見ツール、ファン体験、ライセンス・ソリューション、そして商機の基盤となるでしょう。

4. 不正行為とAIによる希薄化を止め、責任あるモデルを取り入れる

ストリーミングに対する信頼は、バリューチェーン全体で不正対策を実施するための、プラットフォーム、ディストリビューター、権利者、業界団体の協力にもかかっています。報酬制度やレコメンド制度を悪用しようとするあらゆる行為に対し、断固たる措置が必要です。これまでの取り組みを評価するとともに、業界横断的な協働が必要だという認識が広がっていることを歓迎します。その方が効果的であり、相反する解決策が併存することも避けられます。

インディペンデント企業はリソース面の制約から特に影響を受けやすいというだけでなく、デジタル音楽市場の健全性そのものが問われていると考えています。より厳格な不正対策における協調が必要であり、権利者に問題が及ぶ前に適切なレベルで手を打つことも求められます。ここには例えば、無許諾のAIツールで生成されたコンテンツ、速度を上げ下げしたトラック、他人のアーティスト・プロフィール上に不正に表示されるトラックなどが含まれます。協調した行動をとり、その理由を説明することは、エコシステムの真摯な担い手が、アーティストから託された音楽を守ることにいかに真剣であるかを示すものです。これは明確なメッセージとなり、ひいてはファンにとっての意味やつながりを、そしてもちろん価値提案そのものを強めます。同じことは、ストリーミングに限らず他のサービスにも当てはまります。

アーティスト認証（artist verification）、堅牢なKYC（顧客確認）と不正防止システム、さらに操作行為を抑止する経済的措置（対象を絞ったキャリッジフィーや常習的違反者への厳しい制裁金など）は、いずれも、偽アカウントや人為的ストリーミング（artificial streaming）を検知するプラットフォーム側の取り組みと並んで、それぞれの役割を担い得ます。すでに実施されている施策もありますが、より厳格にする必要が

あります。同時に、適切な歯止めと是正の仕組み、透明性、明確なコミュニケーションも整備し、正当なアーティストやレーベルが必要な際に十分な救済を受けられるようにしなければなりません。例えば、自らのレパートリーが不正の隠れ蓑に使われた場合や、誤って識別された場合などです。これはIMPALAが2023年にすでに求めていた点でもあります。初期に策定された業界横断的な行動規範（コード・オブ・プラクティス）を、現在の課題を踏まえて改訂し、講じられた措置について明確にすべきです。Music Fights Fraud Alliance のような取り組みや、専門の検知システム提供事業者からの情報も重要な役割を果たします。

悪意ある行為者が足がかりを得られないよう、基盤となるインフラも堅牢でなければなりません。メジャー系・独立系を問わず、すべてのディストリビューターに対し、音楽および関連コンテンツが配信システムを通過する前に、すべてのクライアントとコンテンツを検証するための業界最先端のツールとベストプラクティスを適用し、「パイプを清潔に保つ（clean the pipes）」ことを求めます。

ストリーミング操作は競争上の問題でもあります。絶え間ない攻撃への対応にはリソースを要するため、インディペンデントは狙われやすく、問題の規模の大きさによって不釣り合いに大きな打撃を受けています。会員各社には、この点に関するIMPALAのガイダンスを参照いただきたく思います。構造的な障壁を生まないためには、前述のとおり適切なレベルでの対応が不可欠であり、また新しいツールは、前述の歯止めと是正の仕組みとともに、すべての権利者に同時に利用可能とされなければなりません。

AIツールは不正や操作の検知を改善することができ、私たちは過去の提言でもこの用途を推奨しました。しかし一方で、AI生成コンテンツは不正行為者を助けるものでもあり、構造的な課題を突きつけています。人間が創作した音楽の希薄化を防ぎ、エコシステム全体に確実性をもたらし、ライセンスされたAIツールのための独立した領域を確立することを、方針としなければなりません。これには2つの側面があります。定義の標準化と、実質的にAI生成されたコンテンツをどう扱うかの決定です。

来歴情報について前述したとおり、「実質的にAI生成されたコンテンツ」の標準的な定義と、使用されたツールの開示が鍵となります。DSPによるものを含め、コンテンツへのタグ付けに関するこれまでの取り組みを歓迎するとともに、業界横断的なフレームワークに向けた作業の加速を支持します。これは単なる識別作業にとどまりません。実質的にAI生成されたコンテンツをどう扱うかも決めなければなりません。各サービスの対応は現在まちまちであり、これは標準化されるべきです。IMPALAの提案は次の2点です。（i）無許諾ツールの使用は、そのコンテンツを自動的に権利侵害とみなすものとし、アップロード、報酬、発見の各システムから排除する。（ii）ライセンスされたツールによる生成AIコンテンツは、適切に管理・表示され、フィルタリングで除外できるようにする。これは人間の音楽とは別の商品であるため、独立した領域にとどめておくことが合理的であり、音楽ロイヤルティの原資（ロイヤルティ・プール）やレコメンドシステムに含めるべきではない。

レーベルやアーティストが関心を持ち、責任あるライセンス型AIモデルで協業したいと望む場合には、ストリーミング・サービスのアドオンとして提供される場合を含め、自由にそうできるべきです。インディペンデント・レーベルが、録音物（原盤）の利用に関する契約を締結する前に、こうした論点を自社のアーティストと話し合う選択をしていることも承知しています。加えて、声、肖像、氏名、イメージ（voice, image, name or likeness）の利用には通常アーティストの同意が必要であり、これを実務的に管理するためのツールの開発を奨励します。適切な同意が得られていることを前提とした、責任あるAI活用のファン体験の実験を歓迎します。こうしたモデルは現在、無許諾ツールが不公平な競争条件を生み出していることによって妨げられています。

権利の観点から音楽の利益を守ることが鍵となります。利用に先立って個別の許諾が必要です。学習（トレーニング）その他のAI関連の利用について、沈黙は同意を意味しないこと、また、いかなる著作権の例外規定や標準的な利用規約も同意にはあたらないことを、明確にしなければなりません。すべての権利者に対し、自らの権利を留保していることを公に、またすべての取引先に対して確認するというIMPALAの助言に従うよう強く求めるとともに、WINのAI原則も併せて参照いただきたく思います。レーベルは、自社の権利が尊重されているかを確認するため、デジタル・サービスやディストリビューターとの契約内容を点検すべきです。

5. 気候への影響を削減し、集団的なイノベーションを強化する

健全なデジタル市場は、エコシステムを改善し新たなビジネスモデルや慣行を支える革新的な取り組みによって発展します。イノベーションのためには、セクターが新しいアプローチを継続的に試し、他分野から学び、基準を高め、共通の課題に協働して取り組むことが求められます。

インディペンデントは、アーティストへの公正な報酬やAI原則から、サステナビリティ、多様性、倫理的な事業慣行に至るまで、一貫して変革を先導してきました。さまざまな側面におけるインディペンデントの貢献は、インディペンデント・セクターの価値に関するORCAの報告書、

および前述のダン・ファウラーによるエコシステム報告書に整理されています。

デジタル・エコシステムにおいて私たちは、データの効率化、フォーマットの削減、カタログの重複解消、アップロードの氾濫への対処、そしてエネルギー消費や水使用量などを低減するためにチェーンのあらゆる地点でより持続可能な選択を促すことに、共通の利益を有しています。ホットスポットを特定し、削減戦略や報告基準について合意するには協働が鍵となります。指標としては、保存トラックあたりの排出量、1再生あたりの排出量、不正行為やAI生成コンテンツの影響などが考えられます。

インディペンデント・レーベルおよびディストリビューターは、研修、ガイダンス、カーボン計算ツール（カーボン・カリキュレーター）を含むIMPALAの無料ツールを活用して、目標を設定し自らの影響を削減することができます。Music Climate Pact には、サービスへの納品時点までの排出に関するデジタル分野固有のガイドラインがあり、音楽がDSPの運用管理下に入った後はDSPが責任を負うものとされています。Murmur のような気候投資ファシリティも利用可能です。持続可能な選択を後押しし、共通の目標と行動を策定するために、アーティスト、ファン、DSP、サプライヤーと連携することが重要です。

あらゆる事業慣行にわたるイノベーションはデジタル市場の土台であり、プラットフォームの支援とパートナーシップを得ながら、イノベーションを先導してきたインディペンデント・セクターの長い伝統を続けていくことは、クリエイター、事業者、オーディエンスのすべてにとって音楽エコシステムを良くするものです。

これらの提案が重要である理由

インディペンデント・レーベルは、不可欠なリスクテイク、専門性、そしてリーチをもたらす存在であり、あらゆる形態の新譜、新進アーティスト、多様な音楽への主要な投資家です。彼らはあらゆる地域、ジャンル、オーディエンスにまたがって活動し、音楽サービスを魅力あるものにしている新譜と多様性の相当部分を担っています。インディペンデント音楽セクターは音楽産業の中心に位置し、情熱と信念と投資をもって、ローカル・シーンから世界的な成功まで、幅広い音楽領域で長期的かつ持続可能なアーティストのキャリアを築いています。

このことは、本提言と、独立性および多様性を実質的に支え強化する構造的変革の必要性に、大きな重みを与えています。これが実務上何を意味するのかは、デジタル音楽サービス向け、およびレーベル・ディストリビューター向けに、附属書で示しています。

共に取り組み、12か月後に見直す

私たちは、関係者の皆さまやセクターの他の領域との長年にわたる関係を大切にしており、不正行為やAIをはじめとする課題への対応がすでに進展していることを評価しています。これらは重要な課題であると同時に、議論の焦点を広げることも不可欠です。エコシステム全体にまたがる課題に単一の解決策は存在せず、さまざまな側面を方程式に組み込む必要があります。

共通の野心が実現すれば、ファンとのつながりはより強固になり、エコシステムのさまざまな階層で、より多くの現役アーティストとレーベルが自らの芸術で生計を立てられるようになるでしょう。

音楽経済は、より大きく、より持続可能な機会を提供するようになります。これはデジタル市場の新たな標準となり、規制を最小限にとどめ、信頼と透明性の面で音楽セクターが果たすリーダーシップを際立たせるはずです。

これから始まる作業と、1年後に共に進捗を測ることを楽しみにしています。

本提言がデジタル・サービスにとって意味すること

収益を拡大し、音楽に帰属する収益を確保する：価格を引き上げ、無料プランを再考する。スーパーファン向けティアを開発する。他コンテンツによる音楽ロイヤルティおよび値上げ分の希薄化を認めない。クリエイター・エコノミー向けの新たなロイヤルティ戦略を策定する。
支払いを公正にする：収益化基準を撤廃する。維持する場合は、認証済みのアーティストには支払い、留保した資金は異なる方法で分配する。新進アーティストと多様性を支える代替的な収益モデルを検証する。
納品（デリバリー）の柔軟性を確保する：収益化されない音楽やその他適切に扱われない音楽について、ペナルティなしにDSPへの納品を見合わせられるようにする。競争を促す特別な機能を推進する。
より強いつながりを築く：人間のキュレーター・エディターを雇用する。アーティストとファンをつなぐ場やその他の機能を活用してファンと関わり、データを共有する。十分に代表されていない国々での体制を強化する。
多様性にコミットする：新譜、新進アーティスト、そしてさまざまな形の多様性（文化、EDI（公平性・多様性・包摂性）の要素、言語、地域、ジャンル）を推進する。具体的な取り組みについて年次で報告する。
真の発見可能性を実現する：嗜好やレコメンドに影響する要素について、真正性、監査可能性、透明性を確保する。特定の権利者を優遇するバイアスや金銭的バイアスを排除する。
来歴情報の表示を適用する：レーベル所属アーティスト（メジャー系／独立系）、セルフリリース、ライブラリー音源、AI生成（使用ツール）、その他のタグを区別する業界横断的な仕組みに合意する。
不正行為を根絶する：KYC、アーティスト認証、メタデータ、制裁金・キャリッジフィー、公平な競争条件のための保護的な歯止めと是正の仕組みについて権利者と協働する。人為的な再生操作を防止し、セクターの行動規範を改訂する。
人間による創作を守る：生成AIコンテンツによる希薄化を止める（ロイヤルティも発見機能も付与しない）。ファン向けの責任あるAI機能（DJ、ミックスなど）について権利者と協働する。無許諾AIトラックのアップロードを止める。
サステナビリティで協働する：協調的かつ透明性のある形で影響削減の方法を検討し、さまざまな指標（保存トラックあたり、1再生あたりの炭素排出量、不正行為および生成AIコンテンツの影響）について報告する。

本提言がレーベルおよびディストリビューターにとって意味すること

来歴情報フレームワークを確立する：表示（ラベリング）は発見と健全性のための好機である ― レーベル所属アーティスト（メジャー系／独立系）、セルフリリース、ライブラリー音源、AI生成（使用ツール）など。
パイプを清潔に保つ：すべての音楽と各クライアントを検証する。不正行為と操作に関する規範の改訂に業界全体で取り組む。悪質な行為者を排除し善良な行為者を守る、歯止めと是正の仕組みを備えたインセンティブの設計に協力する。
多層的なAIポリシーを適用する：学習利用について権利を留保していることを公に確認する。アーティストと協議する。「実質的にAI生成されたコンテンツ」の業界定義と取扱いに合意する。責任あるツールを取り入れる。
多様性とつながりを推進する：新譜と多様性への投資を継続する。ファンと関わる機能を活用する。各サービスにデータを求める。IMPALAの新しいEDIツールキットを用いて、事業活動におけるEDIの状況を測定する。
公正なロイヤルティを支払う：WIN「フェア・デジタル・ディールズ宣言」に沿った、公正かつ現代的なデジタル・ロイヤルティ料率を支払う。旧契約は再評価する。ソーシャルメディアおよびクリエイター・エコノミーとの関係を見直す。
株式売却益その他の条件を分かち合う：アドバンス（前払金）、ミニマム・ギャランティ、DSP株式の売却益などは、所属・契約アーティスト、および流通・配信を請け負うレーベル全体に分配されるべきである。プレイリストその他のコミットメントについても同様とする。
透明性を確保する：アーティストの収益は、契約書およびロイヤルティ計算書において明確に説明されなければならない。計算書には要約と、理解に足る十分な明細の双方を備えること。
セッション実演家を支える：非フィーチャード実演家の貢献に関する業界横断的な国内協定が存在しない場合には、報酬と条件についての交渉を促す。
持続可能な選択を後押しする：炭素排出その他の影響を削減するための目標を設定しガイドラインに従う。IMPALAのカーボン計算ツールで測定する。ファン、アーティスト、サプライヤーとコミュニケーションを図り、気候投資ファシリティを活用する。
セクターのイノベーションを先導する：革新的な取り組みによってエコシステムを改善し得る領域で活動を続け、新しいビジネスモデルや慣行を支援し、セクターがいかに先導しているかを示す。